

研究報告

グループホーム実習に関連した看護学生の思いと

認知症高齢者イメージの変化

棚崎由紀子¹⁾ 光貞美香¹⁾ 田村一恵¹⁾¹⁾ 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科

キーワード ; 看護学生, グループホーム実習, 認知症高齢者イメージ, グループホーム実習に関連する思い

I. 緒言

認知症高齢者の増加とともに認知症ケアの重要性が高まる中, 老年看護学領域の看護教育への期待も年々増大していると推測される. しかし, 認知症ケアは, 高齢者看護の全スキルを駆使し統合させたより高度な看護技術が必要とされ, 看護職者の心のゆとり, 柔軟性, 常識にとらわれない豊かな感性と創造力が要求されている¹⁾.

老年看護学では, 多様化する家族形態の変化によって高齢者との接触経験が少ない学生が増加しており, 高齢者理解の難しさが課題となっている. さらに, 認知症高齢者と関わりを持ったことがない多くの学生については, 認知症の専門知識を学んだとしても抽象的な把握にとどまっているのが現状である.

研究者は, 平成 22 年より 4 年生前期の学生に対して, 老年看護学実習の一環である 2 日間のグループホーム実習 (以下, GH 実習) の指導を行っている. 認知症ケアの必要性が高まる中, 将来中心的役割を担っていく学生に対して, (1) グループホームの特徴を知り, 認知症高齢者に対するケアの特殊性を理解する.

(2) 認知症高齢者の「今の世界」に寄り添うことができる. (3) 共に時間を過ごすことにより, グループホームに入居している認知症高齢者の生活の場を知ることができる. 以上の 3 項目を実習目標として設定し, 取り組んでいる.

研究者は, 昨年 2 日間の GH 実習において, 学生の認知症高齢者イメージは実習後肯定的に変化するということを明らかにした²⁾. 認知症高齢者と関わることで深まった体験的理解が肯定的イメージへと変化したのではないかと考えられた. 先行研究では, 認知症高齢者に関わる看護者の捉え方がケアの基盤になり, さらに肯定的なイメージを持つことがケアの質を高める

可能性がある指摘されている³⁾.

以上より, 将来認知症ケアの担い手となる看護学生に対し, GH 実習を通して形成される認知症高齢者イメージの特性を継続して明らかにすることは意義があると捉えた. さらに, 学生の実習に対するモチベーションが実習姿勢に大きく影響を及ぼすことから, 実習前後の実習に関連した学生の思い (実習に対する不安, 認知症高齢者と関わりたい思い等) と認知症高齢者イメージの変化について検討し, 今後の GH 実習に対する指導方法の示唆を得たいと考える.

II. 目的

看護学生を対象に, GH 実習前後の実習に関連した思いと認知症高齢者イメージの特性及び変化を明らかにする.

本研究では「GH 実習に関連した思い」を, 実習に対する不安や楽しみの感情面と, 認知症高齢者と関わりたい対象に対する思いを合わせたものと定義する.

III. 研究方法

1. 調査対象

対象は, 老年看護学実習で 2 日間の GH 実習を行っている看護系大学 4 年生の 44 名である.

2. 調査期間

2011 年 5 月から 7 月まで

3. 調査方法及び内容

老年看護学実習の GH 実習 (2 日間) 前後に, 研究者作成の無記名自記式質問票調査を実施した. 調査内容は, 先行研究及び GH 実習の目標などから精選・抽出した 1) ~ 3) の計 40 項目である.

1) 属性及び背景

性別、年齢、祖父母との同居状況、家族内の認知症高齢者の有無、これまでの認知症高齢者との接触経験、認知症高齢者への好意等の9項目を設定した。

2) GH 実習に関連した思い

実習に対する不安、認知症高齢者と関わりたい思い、実習を楽しみにしているか等5項目を設定した。それぞれ「とても思う：4点」より「全く思わない：1点」の4段階評価で回答を求め、得点化した。実習後の設問は、過去形に置き換え設定した。

3) 認知症高齢者イメージ

認知症高齢者イメージについては、Semantic Differential method (以下、SD法)を用いた。形容詞対は古谷野ら⁴⁾が老人イメージ調査で使用した19項目と、先行研究^{5)・8)}より精選し研究者らが追加した7項目の全26項目を設定した。設問は「あなたは認知症高齢者に対して、どのようなイメージを持っていますか」とし、実習前後に否定的な形容詞(1点)から肯定的な形容詞(5点)の5段階より評価を求め、得点化した。

4. 分析方法

調査データは、記述統計量を算出し検討した後、実習前後の各項目の比較にt検定を用いて分析した。

認知症高齢者イメージは実習前後の各形容詞対の比較にt検定を用いて分析した後、因子分析(主因子法、バリマックス法)を行い構造化した。統計パッケージはSPSS19.0を用い、有意水準は5%未満とした。

5. 倫理的配慮

対象には事前に口頭にて研究の趣旨・方法等について説明した。さらに研究協力は自由意志であり、成績などの評価とは関係ないこと、個人情報保護に留意し調査することを伝えた。

説明内容に同意した対象へ無記名の質問票を配布し、質問票の提出をもって同意とした。実習前後のデ

ータ管理については、記号による対比表を作成し、個人が特定されないように厳重に取り扱った。

IV. 結果

1. 対象者の概要

看護系大学4年生の女性36名(83.7%)、男性7名(16.3%)の43名より回答を得た。平均年齢は22.4±4.5歳であった(表1)。

表1 対象の属性

項目	n=43(%)
性別	
女性	36 (83.7)
男性	7 (16.3)
平均年齢 ± SD	22.4 ± 4.5

祖父母、もしくは祖父、祖母のいずれとも同居していない学生は28名(65.1%)であった。家族内に認知症高齢者のいる者は9名(20.9%)であり、GH実習までに認知症高齢者との接触経験が全く無かった者は9名(20.9%)であった。

認知症高齢者との接触時期について最も多かったのは、大学入学後の27名(75.0%)であり、次いで中学生以前の4名(11.1%)であった。大学入学後の接触経験者の多くが、看護学実習での関わり(24名：54.4%)と回答しており、以下に家族内の認知症高齢者(9名：20.5%)、看護体験(8名：18.2%)、ボランティア(3名：6.82%)であった。看護学実習の内訳は、基礎看護学実習6名(20.7%)、成人看護学実習4名(13.8%)、その他の実習19名(65.5%)であった(複数回答)。

人と接することに対して「とても好き」16名(37.2%)、「少し好き」16名(37.2%)「あまり好きではない」10名(23.3%)、「全く好きではない」1名(2.3%)と回答しており、認知症高齢者に対する好意については「とてもある」6名(14.3%)、「少しある」30名(71.4%)、「あまりない」6名(14.3%)であった。

表2 実習前後のGH実習に関連した思いの比較 (n=43)

項目	Mean±SD		t検定
	実習前	実習後	
楽しみ	3.27 ± 0.67	3.83 ± 0.38	**
認知症高齢者と関われる	2.93 ± 0.57	3.80 ± 0.40	**
認知症高齢者と継続して関わりたい	3.27 ± 0.63	3.68 ± 0.47	**
不安(逆転項目)	2.76 ± 0.80	2.22 ± 1.03	**
高齢者に好意を持っている	3.00 ± 0.51	3.60 ± 0.50	**
認知症高齢者に好意を持っている	3.41 ± 0.63	3.73 ± 0.45	**
人と関わるのが好きである	3.12 ± 0.78	3.29 ± 0.87	**
コミュニケーションが得意である	2.24 ± 0.83	2.90 ± 0.77	**

t検定 **p<0.01

2. 実習に関連する思い (表2)

GH 実習への楽しみについては、実習前「とても思う」17名 (39.5%)、「少し思う」20名 (46.5%)、「あまり思わない」5名 (11.6%)、「全く思わない」1名 (2.3%) であり、平均得点は 3.27 ± 0.67 点であった。実習後は「とても思う」34名 (81.0%)、「少し思う」7名 (16.7%) であり、平均得点は 3.83 ± 0.38 点であった。実習後、有意に実習への楽しみは高まった ($t(40) = -4.63, p < 0.01$)。

認知症高齢者と関わりたい思いについては、実習前「とても思う」6名 (14.0%)、「少し思う」29名 (67.4%)、「あまり思わない」8名 (18.6%) であり、平均得点は 2.93 ± 0.57 点であった。実習後は「とても思う」33名 (78.6%)、「少し思う」8名 (19.0%) であり、平均得点が 3.80 ± 0.40 点であった。実習後、有意に関わりたい思いは高まった ($t(40) = -7.52, p < 0.01$)。

その他認知症高齢者と継続して関わりたい、コミュニケーションが得意 ($t(40) = -3.07, t(40) = -3.66, p < 0.01$) 等の思いも実習後向上し、実習に対する不安は減少した ($t(40) = 2.39, p < 0.01$)。

不安を除く4項目において平均得点が最も低かったのは、実習前後のどちらも「コミュニケーションが得意」(実習前 2.24 ± 0.83 点、実習後 2.90 ± 0.77 点) であり、最も高かった項目は、実習前では「認知症高齢者と関わりたい」(3.27 ± 0.63 点)、「実習が楽しみ」(3.27 ± 0.67 点) であり、実習後は「実習が楽しかった」(3.83 ± 0.38 点) であった。

3. 認知症高齢者イメージ

認知症高齢者イメージとして用いた形容詞対26項目の平均合計得点は、実習前 70.00 ± 8.01 点、実習後 85.90 ± 12.12 点であり、実習後有意に得点は上昇した ($t(38) = -7.07, p < 0.01$) (表3)。

実習前	実習後	t検定
70.0 ± 8.0	85.9 ± 12.1	**

t検定 **p < 0.01

図1に示すように、実習前では【無愛想な⇔愛想のよい】(3.02 ± 0.79 点) 【冷たい⇔暖かい】(3.27 ± 0.74 点) 【憎らしい⇔愛らしい】(3.15 ± 0.57 点) の3項目を除いた23項目が中立点である3.0点を下回る否定的評価であり、最も否定的であったのは【孤立⇔連帯】(2.15 ± 0.96 点) であった。実習後では【遅い⇔速い】(2.78 ± 0.88 点) 【落ち着きのない⇔落ち着きのある】(2.78 ± 0.94 点) の2項目を除いた24項目

目が3.0点を上回る肯定的評価であり、最も肯定的であったのは【憎らしい⇔愛らしい】(4.07 ± 0.76 点) であった。

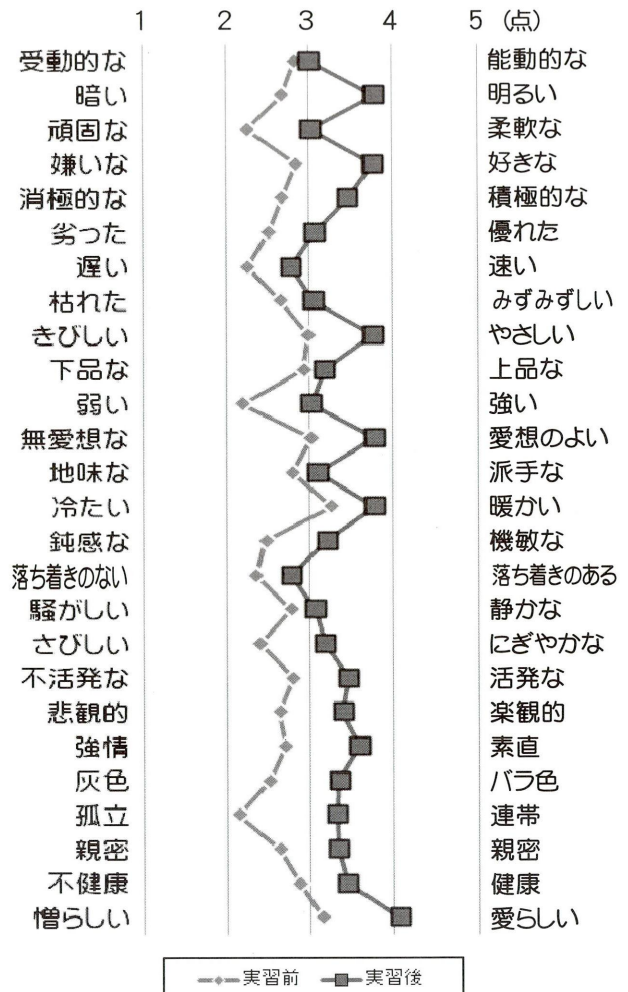


図1 実習前後の認知症高齢者イメージ (n=43)

また、【受動的な⇔能動的な】(実習前 2.85 ± 0.70 点、実習後 3.00 ± 0.93 点) 【下品な⇔上品な】(2.90 ± 0.54 点、 3.17 ± 0.86 点) 【騒がしい⇔静かな】(2.80 ± 0.90 点、 3.07 ± 0.65 点) の3項目を除いた23項目において、実習後有意に肯定的評価へと変化した ($p < 0.01$)。

次に、因子負荷量0.4以下となった形容詞対7項目を削除した19項目について主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、認知症高齢者イメージの構造化を図った。

表4のように、実習前では以下の3因子が抽出された。第1因子は、【騒がしい⇔静かな】 【冷たい⇔暖かい】に代表された8項目より「温厚性」($\alpha = .79$)と命名した。第2因子は、【落ち着きのない⇔落ち着きのある】 【下品な⇔上品な】などの6項目より「円熟性」($\alpha = .76$)と命名した。第3因子は、【劣った⇔

優れた】【遅い⇔速い】等の5項目より「有能性」($\alpha = .75$)と命名した。これら3因子の累積寄与率は41.20%であり、各因子の内的整合性はCronbachの

α 係数により確認され(前述)、下位尺度としての信頼性が認められた。

表4 認知症高齢者イメージの構造(因子分析結果) n=43

形容詞対	因子負荷量		
	温厚性	円熟性	有能性
さびしい⇔にぎやかな	.724	.164	-.264
騒がしい⇔静かな	.680	.044	.118
冷たい⇔暖かい	.593	-.028	.279
頑固な⇔柔軟な	.516	-.051	.176
悲観的⇔楽観的	.502	.468	.079
不活発な⇔活発な	.479	.280	.081
厳しい⇔優しい	.467	.220	.194
強情⇔素直	.443	.086	.055
落ち着きのない⇔落ち着きのある	.131	.699	.379
枯れた⇔みずみずしい	.033	.612	.261
灰色⇔バラ色	.267	.609	-.120
嫌いな⇔好きな	-.100	.556	.269
不健康⇔健康	.172	.457	.294
下品な⇔上品な	.413	.428	.013
遅い⇔速い	.111	.317	.706
弱い⇔強い	.239	.033	.631
地味な⇔派手な	.042	.086	.565
劣った⇔優れた	-.015	.161	.554
鈍感な⇔機敏な	.239	.181	.509
固有値	5.26	2.47	1.78
寄与率	15.42	13.09	12.70
累積寄与率%	15.42	28.51	41.20

因子分析(バリマックス法)

各因子の平均得点は、実習前では第1因子「温厚性」: 2.72 ± 0.56 、第2因子「円熟性」: 2.69 ± 0.45 点、第3因子「有能性」: 2.44 ± 0.47 点であり、実習後では「温厚性」: 3.41 ± 0.50 点、「円熟性」: 3.26 ± 0.50 点、「有能性」: 3.03 ± 0.64 点であった。実習前は3因子

全てにおいて中立点である3.0点を下回る否定的評価であったが、実習後には3因子全てが中立点を超えた肯定的評価となった($t(40) = -5.32$, $t(40) = -4.52$, $t(40) = -3.32$, $p < 0.05$) (表5)。

表5 認知症高齢者イメージ実習前後の因子得点 (n=43)

Mean±SD	温厚性	円熟性	有能性
実習前	2.72 ± 0.56	2.69 ± 0.45	2.44 ± 0.47
実習後	3.41 ± 0.50	3.26 ± 0.50	3.03 ± 0.64

t検定 * $p < 0.05$

V. 考察

看護学生のGH実習前後の実習に関連した思いと認知症高齢者イメージの変化について考察していく。

1. 対象の背景

高齢者と同居していない者は65.1% (28名)と多かったが、GH実習までに認知症高齢者との接触経験がなかった者は20.9% (9名)と少数であった。しかし、

接触経験者のうち70.6% (24名) は入学後に実施した実習での関わりであり、入学以前に限定すると接触経験者は23.3% (10名) と少ないことが明らかとなった。

また、複数回答ではあるがボランティアや看護体験等を通して自主的に認知症高齢者と関わりを持った接触経験者が11名いたのは、将来看護職を目指す学生の特性が表れたと考える。

更に、人と接することが苦手であると25.6% (11名) の学生が感じていた中で、認知症高齢者に対して好意を持っている学生が85%以上 (36名) いたことは、後述する実習前の「実習への楽しみ」の平均値が、他の項目よりも高かったことも影響していると考えられる。ただ、4年次においても人と接することに苦手意識を持っている学生が4分の1を占めていたことは、今後コミュニケーション能力の向上に向けた支援が必要であることが示唆された。

2. 実習に関連した思い

2日間のGH実習を通して、学生の認知症高齢者と「関わりたい」「楽しかった」という実習に関連した思いは全ての項目において向上し、実習に対する不安は軽減した。中でも実習後、「認知症高齢者と関わりたい思い」が増大し「実習に対する不安」が軽減した要因として、実習施設のスタッフの関わりによって認知症高齢者が穏やかに過ごされている様子や、学生への指導や関わりなど医療機関とは違うグループホームの「住まい」という家庭的な雰囲気の中で行われる実習を通して、学生自身のモチベーションが向上したことが大きいのではないかと推測する。

また、実習中のカンファレンスやプロセスレコード等より、学生は「認知症高齢者が何の抵抗も無く受け入れてくれたことが嬉しかった」と報告している。学生の多くは、認知症高齢者の側に寄り添い、同じ時間を過ごす中で、認知症高齢者が同じ内容を繰り返して何を伝えようとしているのか、これまでの経験等を駆使しても把握できない、思うようにコミュニケーションが成立しないこと等に歯がゆさを感じていた。しかし、そのような状況の中で認知症高齢者たちは、理解できない自分たちに一生懸命メッセージを伝えようとかかわってくれていたと言う。

認知症高齢者は相手の言葉を受け取る力、受け取ったことを解釈する力、自分の思いを表現して相手に伝える力に問題が生じている状態あり⁹⁾、認知症高齢者とのコミュニケーションは看護師経験のある者でも困難とされる。

2日間の短い実習を通して達成感を得ることや苦手意識の克服に至ることは難しいことではあるが、コミュニケーションが主体となるこのようなGH実習にお

いては、学生自身が認知症高齢者との距離が少しでも縮まったと自覚できるようなコミュニケーション技術の習得が必要であると考えられる。今後、さらに、学生の能力に応じたコミュニケーション関連の授業構成を検討していきたい。

3. 認知症高齢者イメージ

2日間のGH実習を通して認知症高齢者イメージは否定的評価から肯定的評価へと有意に変化した。また、実習前では設定した26項目のうち、平均得点が中立点である3.0点を上回ったのは【地味な⇔派手な】、【冷たい⇔暖かい】【憎らしい⇔愛らしい】の3項目だけであり、その他23項目は2.15～2.95の範囲で大きく中立点を下回った。また、実習後では【遅い⇔速い】【落ち着きのない⇔落ち着きのある】の2項目のみが中立点を下回り、その他24項目は3.02～4.07の範囲で肯定的評価となった。

以上のように学生は、2日間のGH実習ではあったが、実際に認知症高齢者と関わることによりこれまで抱いたイメージとの違いを感じ取っていた。特に、前述したように認知症高齢者の穏やかな表情はGH実習施設のスタッフの個別ケアの質の高さによる。中でも「怒り」の感情があまり表面化することなく笑顔で穏やかに過ごしている認知症高齢者と、グループホームの特殊性から家族の一員のような感覚で関わったことが、実習後の肯定的イメージに反映されたのではないかと考えられた。

また、認知症高齢者にとって学生の年代は孫と重なる。実習とは言え、孫の年代の学生が側にいてニコニコと微笑みかけてくれる姿を通して、認知症高齢者自身も普段とは異なる状況に、気分が高揚したのではないかと推察される。

認知症高齢者イメージは、因子分析の結果より「温厚性」「円熟性」「有能性」の3因子で構成された。実習前は3項目全てにおいて中立点を下回っていたが、実習後はそれを上回る肯定的評価となった。中でも「温厚性」は実習前後どちらも平均得点が高く、「有能性」は低かった。特に、「有能性」については「温厚性」「円熟性」の内面的なイメージと異なり、認知症高齢者の外見、特に機能面から受ける印象が反映される内容と考えられた。事実、実習中の入居者の平均年齢は70歳後半であり、多くが介護保険認定の要介護3～4であった。身体機能、中でも移動・移乗に関する機能面の著しい低下が低い得点に関連したと考えられる。

以上のことから、2日間のGH実習を通して、学生の認知症高齢者イメージは肯定的なものへと変化し、認知症高齢者に対する関わりたい等の思いは育まれていった。また、講義だけでは想像できなかった認知症

高齢者の姿や生活について体験的理解を通して学ぶことができていた。しかし、実習前のコミュニケーションに対する思い（自己評価）が極端に低かったことから、今後は実習導入の関わり方として、実習に対するモチベーションの向上に視点をおいたコミュニケーションに対する支援を講義や実習前オリエンテーションに取り入れ、再構成していくことが必要であると示唆された。また、体験的理解が正しい知識として認識できているかを含めた実習評価も検討していきたい。

VI. 本研究の限界

この度、看護学生を対象に実習に関連した思いと認知症高齢者イメージとの関連について明らかにしていない。また思いやイメージを形成する要因の詳細までは言及できなかった。今後の実習評価を行う上での課題としたい。

VII. 結論

1. 学生の認知症高齢者と関わりたい思いは実習後増大し、実習に対する不安は軽減した。
2. やや否定的であった認知症高齢者イメージは、肯定的評価へと変化した。
3. 認知症高齢者イメージは、「温厚性」「円熟性」「有能性」の3因子で構成されていた。

謝辞

調査にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 奥野茂代：老年看護学 概論と看護の実践 第4版，p.380，ヌーヴェルヒロカワ，東京，2011.
- 2) 棚崎由紀子，奥田泰子他：看護学生のグループホーム実習における認知症知識及び認知症高齢者イメージの変化とその要因の検討，宇部フロンティア大学看護学ジャーナル，4(1)，p.51-59，2010.
- 3) 長畑多代，松田千登勢等：介護老人保健施設で働く看護婦の痴呆性高齢者とその言動に対するとらえ方，大阪府立看護大学紀要，8(1)，p.19-27，2002.
- 4) 古谷野亘，児玉好信ほか：中高年の老人イメージ—SD法による測定—，老年社会科学，18(2)，p.147-152，1997.
- 5) 桂晶子，佐藤このみ：看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ，宮城大学看護学部紀要，11(1)，p.49-56，2008.
- 6) 奥村由美子，久世淳子：大学生の高齢者イメージに関連する要因—認知症高齢者と健常高齢者のイメージの比較—，日本福祉健康科学論集，12，p.31-38，2009.
- 7) 前畑夏子，服部ユカリほか：老人看護実習による看護大学生の老人イメージの変化，富山医科薬科大学看護学会誌，2，p.103-116，1999.
- 8) 木村誠子，片岡万里：看護学生に老年看護学実習前における認知症高齢者イメージの特性—一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージの比較—，高知大学学術研究報告 医学・看護学編，55，p.37-43，2006.
- 9) 堀内園子：認知症看護入門，p.83，ライフサポート社，東京，2008.